

水稲「西海230号（あきさやか）」の安定生産、品質・食味向上のための施肥法					
[要約] 水稲「西海230号」は同じ晩生熟期の10a当たり基準窒素施用量(7+3+2kg)より <u>基肥</u> を2kg減らし5kg、 <u>穂肥</u> は3kg+2kgとすることで、安定して高い <u>収量</u> を確保でき、 <u>検査等級</u> 、 <u>食味</u> が向上する。					
担当部署	筑後分場・水田高度利用研究室			連絡先	0944-32-1029
対象作目	水稲	専門項目	栽培	成果分類	新技術

「西海230号」は、本研究終了後、「あきさやか」の品種名で品種登録出願されました。

[背景・ねらい]

筑後平坦地に適した晩生の水稲の主食用品種として「西海230号」を選定した。この品種は良食味の多収品種であるが、籾数を確保しやすい特性を有しており、籾数過多となった場合には収量、品質、食味の低下が懸念される。そこで、「西海230号」の収量を安定して確保し、品質・食味を向上させるための施肥法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 「西海230号」は基肥施用量が多いほど m^2 当り籾数が多くなるが、同熟期の「レイホウ」の施肥基準より10a当たり基肥窒素量を2.0kg減肥し5.0kgとすることで登熟歩合が高く、千粒重が重くなり安定して高い収量を確保できる。検査等級及び食味も安定して高い(図1、表1)。また、基肥量削減により、穂いもち病の発生程度をやや低減できる(表1)。
2. 検査等級、食味、収量からみた「西海230号」の10a当たり穂肥窒素量は第1回目が3kg、第2回目が2kg、施用時期は第1回目が出穂期前18日頃、第2回目は出穂前11日頃が優れる(表1)。穂肥の減肥や第2回目穂肥の省略は、玄米タンパク質含有率がやや低下するものの食味は向上せず、収量はやや低下する(表1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 「西海230号」の品質・食味向上、安定生産のための資料として活用できる。
2. 晩生種で成熟期が遅いので、早期落水とにならないよう留意する。落水時期は成熟期前7日頃とする。

[具体的データ]

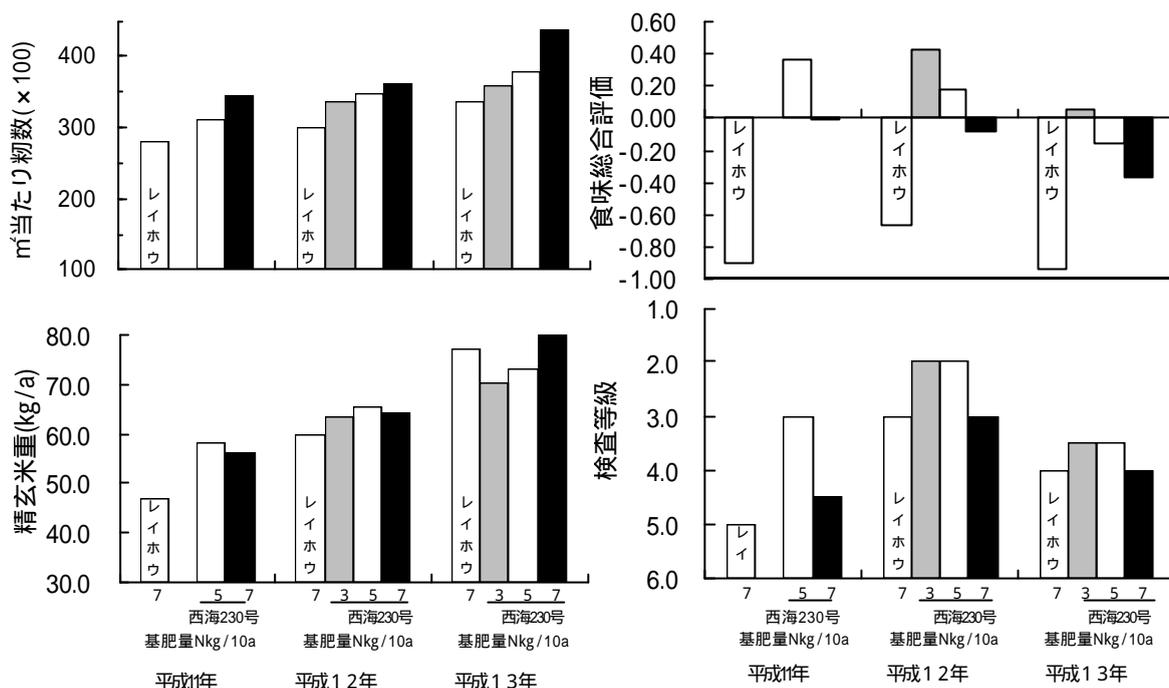


図1 西海230号の基肥量別m²当たり籾数、収量、食味および検査等級

- 注) 1. 穂肥(1回目+2回目)は各区とも3+2(Nkg/10a)、出穂前18日+11日頃施用。
 2. 食味総合評価は農産研究所産のコシヒカリ基準(0.00)。
 3. 検査等級は1等上(1)~3等下(9)で示す。

表1 施肥法が異なる場合の生育、収量、品質および食味(平成11~13年)

品種・系統名	施肥法 Nkg/10a	稈長 cm	穂数 本/m ²	m ² 当り 籾数 ×100粒	登熟歩合 %	精玄米重 kg/a	千粒重 g	穂いもち	倒伏	検査等級	食味総合評価	タンパク質含有率 %
	5+3+2	82	392	346	85	65.6(100)	22.2	1.5	0.4	2.8	0.12	6.6
	5+3+0	82	397	340	83	63.1(96)	21.8	1.2	0	2.5	0.19	6.2
西海230号	5+3+2(早期)	81	412	366	77	62.2(95)	21.6	1.3	0.5	3.5	0.05	6.1
	5+2+1.5	82	395	328	85	62.0(95)	22.1	1.2	0.3	3.0	0.00	6.3
	7+3+2	86	439	382	78	66.7(102)	21.8	1.8	0.8	3.8	-0.15	6.8
レイホウ	7+3+2	92	415	306	83	61.5(94)	23.6	-	1.4	4.0	-0.84	7.6

- 注) 1. 施肥法は基肥+穂肥1回目+2回目、平成11年の早期穂肥区の穂肥量は2+1.5(Nkg/10a)。
 2. 穂肥施用時期(1回目+2回目)は早期が出穂前25日+18日頃、その他は出穂前18日+11日頃。
 3. 倒伏、穂いもちは0(無)~5(甚)、検査等級は1等上(1)~3等下(9)で示す。
 4. 精玄米重の()内の数値は西海230号の5+3+2区を100とした場合の指数。
 5. タンパク質含有率は水分15%に換算した玄米中の含有率。
 6. 食味総合評価は農産研究所産のコシヒカリ基準(0.00)。

[その他]

研究課題名: 中晩生良食味系統の高品質安定栽培法

予算区分: 県単

研究期間: 平成13年度(平成11~13年)

研究担当者: 川村富輝、石塚明子、小田原孝治